

【 復活のトロパリ 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより
 恵深主 爾高

くだり、みっかのほうむりをうけて、
 降三日葬 受

われらをくるしみよりときたまえり、
 我等苦 釋 給 えり、

わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
 我生命復活 主 光

えいはなんぢにきす。
 榮 爾 歸

【 十字架擧祭のトロパリ 第1調 】

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢ
 主 爾 民 救 爾

のぎょうにふくをくだせ、わがくにに
 業 福 降 我 國

さいわいをあたえ、なんぢのじゅうじかに
 福 與 爾 十 字 架

てなんぢのすまいをまもりたまえ。
 爾 住 處 守 給 え。

【 復活のコンダク 第8調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす。
 光 榮 父 子 聖 神 歸

だ い じ ん じ な る し ゅ よ 、 な ん ち は は か よ り ふ く
 大 仁 慈 主 爾 は 墓 復
 か つ し て 、 し せ し も の を お こ し 、 ア
 活 死 者 お 興
 ダ ム を ふ く か つ せ し め た ま え り 。 エ ヴ ア は な ん
 復 活 給 え り 爾
 ち の ふ く か つ を た の し み 、 せ か い の は て
 復 活 樂 世 界 極
 は な ん ち が し よ り お き た る を い わ う 。
 爾 死 興 祝

【 十字架擧榮祭のコンダク 第4調 】

い ま も い つ う も よ よ に 、 ア ミ ン。
 今 何 時 世 世
 あ ま じ て じ ゅ う じ か に あ げ ら れ し ハ リ ス ト ス か み
 甘 十 字 架 擧 神
 よ 、 な ん ち が ど う め い の あ ら た な る す ま い に
 爾 同 名 新 住 處
 な ん ち の じ れ ん を た ま え 、 な ん ち の ち か ら を
 爾 慈 憐 賜 爾 力
 も お っ て わ が く に を た の し ま し め て て き
 以 我 國 樂 敵
 に か た し め た ま え 、 わ れ ら は な ん ち の た 援
 勝 給 我 等 爾 援

す け と し て へ い あ ん の ぶ き 、 か た れ ぬ は
助 平 安 武 器 勝 旗
た を た も て ば な り 。
有

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世
に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖
じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 れめよ。こうえいはちちとこせいしん
 光榮父子聖神
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 聖なるじょうせいのものよ、われらをあわ
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 あわれめよ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 提綱 主日第8調 及び十字架擧榮祭の第7調 】

司祭) ^{つつし} 慎 ^き みて聴くべし、^{しゅうじん} 衆 ^{へいあん} 人に平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{しゅなんぢら} プロキメン、^{かみ} 主 爾 ^{ちかい} 等の神に ^な 誓 ^{つくの} を作して 償えよ、

しゅ なんぢら の か み に ち か い を な し て つ く の
主 爾 等 神 誓 作 償
え よ 、

誦經) ^{かみ} 神は ^し イウデヤに ^{そのな} 知られ、^{おおい} 其名は ^{おおい} イズライリに 大なり、

しゅ なんぢら の か み に ち か い を な し て つ く の
主 爾 等 神 誓 作 償
え よ 、

誦經) ^{しゅ} 主、^わ 我 ^{かみ} が神を ^{あが} 崇め ^ほ 讃め、^{そのあしだい} 其 ^ふ 足 ^{おが} 凳に ^こ 伏し ^{せい} 拜めよ、是れ ^{せい} 聖なり、

しゅ わ が か み を あ が め ほ め 、 そ の あ し だ
主 我 神 崇 讃 其 足 台
い に ふ し お が め よ 、 こ れ せ い な り 。
伏 拜 是 聖

【 ^{アポストロス} 使徒經 182半端 コリント後書6章16~7章1節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒 ^{じん} パヴェルが ^{たつ} コリント ^{こうしょ} 人に ^{よみ} 達する ^{よみ} 後書の ^{よみ} 讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄 弟よ、^{なんぢら} 爾 ^い 等は ^{かみ} 活ける ^{かみ} 神の ^{かつ} 殿なり、^い 神の ^{ごと} 嘗て ^{いわ} 言いしが ^{われかれら} 如し、^{うち} 曰く、^お 我 彼 ^お 等の中に ^お 居り、

かれら うち ゆ われかれら かみ かれらわれ たみ しゅまたいわ ゆえ なんぢら
彼等の中に行かん、我 彼等の神となり、彼等我の民とならん。主 又 曰く、故に 爾 等は

かれら うち い みづか はな けがれ ふ なか しか われなんぢら い われなんぢ
彼等の中より出でて、自 ら 離れよ、汚穢に觸るる勿れ、然らば我 爾 等を納れん、我 爾

ら ちち なんぢらわれ しちよ しゅぜんのうしやこれ い こ ゆえ しあい もの われ
等の父となり、爾 等我の子女とならん、主 全 能 者 之を言う。是の故に至愛の者よ、我

らすで か ごと きやく え おのれ およそ にく しん けがれ いさぎよ かみ おそ
等既に此くの如き許 約を得たれば、己を 凡 の肉と神との 汚より 潔 しくし、神を畏

るを以て 聖を成すべし。

(比較用 口語訳) わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、「わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう」。だから、「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触てはならない。触なければ、わたしはあなたがたを受けいれよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、こう言われる」。愛する者たちよ。わたしたちは、このような約束を与えられているのだから、肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くならうではないか。

【 アポστόロス 使徒経 125 端 コリント前書 1 章 18～24 節 】

誦経) 兄 弟よ、蓋 十 字架の 言 は、滅ぶる者の爲には愚なり、我等救わるる者の爲には神

の 能 なり。蓋 録して云えるあり、我智者の智を 滅し、識者の識を 廢せん。智者 安

にか在る、學士は 安 にか在る、此の世の辯論者は 安 にか在る、神は此の世の智慧を愚と爲

らしめしに非ずやと。蓋 世は其智慧を以て、神を神の智慧に於て識らざりしに由りて、神

は傳道の愚を以て、信ずる者を救わんことを喜 べり。蓋 イウデヤ人は 休 徴を乞い、

エルリン人は智慧を 覓む、然れども我等は 十 字架に釘せられしハリストスを傳う、此れイ

ウデヤ人の爲には 礙、エルリン人の爲には愚、惟召されたる者の爲には、イウデヤ人 及

びエルリン人を論ぜず、ハリストスは神の 能 及び神の智慧なり。

(比較用 口語訳) 十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。すなわち、聖書に、「わたしは知者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしいものにする」と書いてある。知者はどこにいるか。学者はどこにいるか。この世の論者はどこにいるか。神はこの世の知恵を、愚かにされたではないか。この世は、自分の知恵によって神を認めるに至らなかった。それは、神の知恵にかなっている。そこで神は、宣教の愚かさによって、信じる者を救うこととされたのである。ユダヤ人はしるしを請い、ギリシヤ人は知恵を求める。しかしわたしたちは、十字架につけられたキリ

ストを宣べ伝える。このキリストは、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものであるが、召された者自身にとっては、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の力、神の知恵たるキリストなのである。

アポストロス

【 使徒経 203 端 ガラティヤ書 2 章 16～20 節 】

誦經) 兄弟よ、人は律法の行に由るに非ず、唯イイスハリストスを信ずるに由りて義とせらるるを知りて、我等もハリストス イイスを信ぜり、ハリストスを信ずるに由り、律法の行に由らずして、義とせられん爲なり、蓋律法の行に由りては、人一人も義とせらるるなし。若し我等ハリストスに由りて義とせられんことを求めて、自も猶罪人たれば、豈ハリストスは罪の役者たるか。非らず。蓋若し我が毀ちたる者、我復之を建てば、則己の罪人たるを示すなり。我律法に由りて律法の爲に死せり、神の爲に生きん爲なり。我ハリストスと共に十字架に釘せられたり。既に我生くるに非ず、即ハリストスは我の中に生くるなり。我が今肉體に在りて生くるは、我を愛して我が爲に己を捨てし神の子を信ずるに由りて生くるなり。

(比較用 口語訳) 人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである。それは、律法の行いによるのではなく、キリストを信じる信仰によって義とされるためである。なぜなら、律法の行いによっては、だれひとり義とされることがないからである。しかし、キリストにあつて義とされることを求めることによって、わたしたち自身が罪人であるとされるのなら、キリストは罪に仕える者なのであろうか。断じてそうではない。もしわたしが、いったん打ちこわしたものを、再び建てるとすれば、それこそ、自分が違反者であることを表明することになる。わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあつて生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。

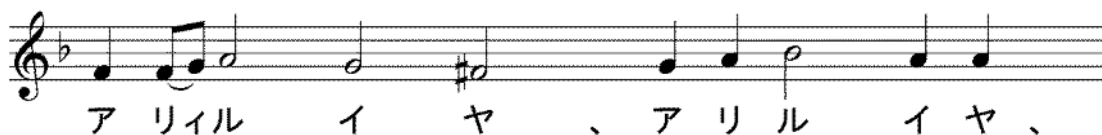
【 アリルイヤ 主日第8調 及び十字架擧榮祭の 第1調 】

司祭) 爾に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) アリルイヤ、

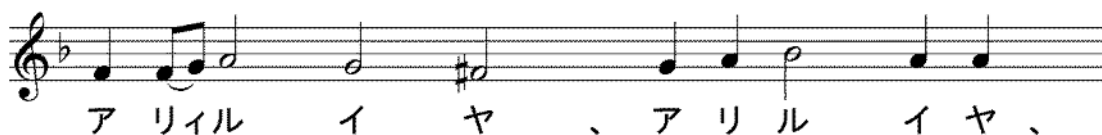


ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、



ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{きた}來^{しゅ}りて主^{うた}に歌^{かみわ}い、神^{すくい}我が救^{かため}の防^よ固に呼^よばん、

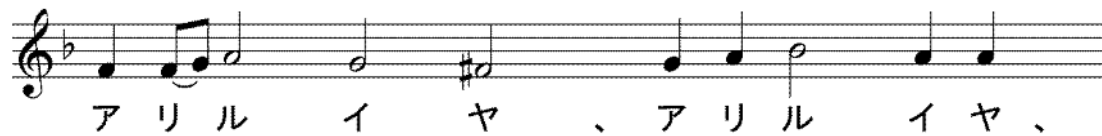


ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、

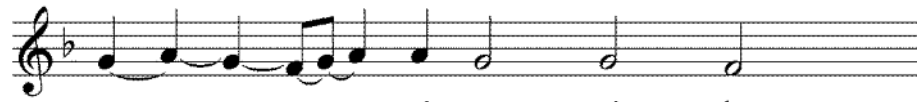


ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{なんぢ}爾^{いにしえ}が古^えより獲^{かい}たる會^{きおく}を記^き憶^{おく}せよ、



ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、



ア リル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと}人を愛^{あい}する主^{しゅ}宰^{さい}よ、我^わが心^{こころ}に神^{かみ}を知る^し智慧^{ちえ}の^い浄^いき光^{ぎよ}を輝^{ひかり}かし、我^わが思^し念^{ねん}

^めの目^{ひら}を啓^{なんぢ}きて、爾^{ふくいん}が福^{おしえ}音^{さと}の教^{たま}を悟^わらしめ給^{うち}え、我^{なんぢ}が衷^{ふく}に爾^{いましめ}の福^{ふく}たる誠^いを

^{おそ}畏^{おそれ}る畏^いをも入^{われら}れて、我^{ことごと}等^{にくたい}が悉^{よく}くの肉^ふ體^{およ}の慾^{なんぢ}を踏^{よろこ}み、凡^{ところ}そ爾^{ところ}の喜^{ところ}ぶ所^{ところ}

を思^{おも}い且^かつ行^{おこな}いて、屬^{ぞくしん}神^{せい}の生^{かつ}活^すを過^{いた}ぐるを致^{たま}させ給^{けだし}え、蓋^{かみ}ハリス^{かみ}トス神^{かみ}よ、

^{なんぢ}爾^わは我^{たましい}が靈^{からだ}と體^{こうしょう}との光^{われらなんぢ}照^{なんぢ}なり、我^{むげん}等^{ちち}爾^{しせい}と爾^{しぜん}の無^{しぜん}原^{しぜん}の父^{しぜん}と至^{しぜん}聖^{しぜん}至^{しぜん}善^{しぜん}にし

^{いのち}を施^{ほどこ}す爾^{なんぢ}の神^{しん}とに光^{こうえい}榮^{けん}を獻^{いま}ず、今^{いつ}も何^よ時^よも世^よ世^よに、ア^よミン。)

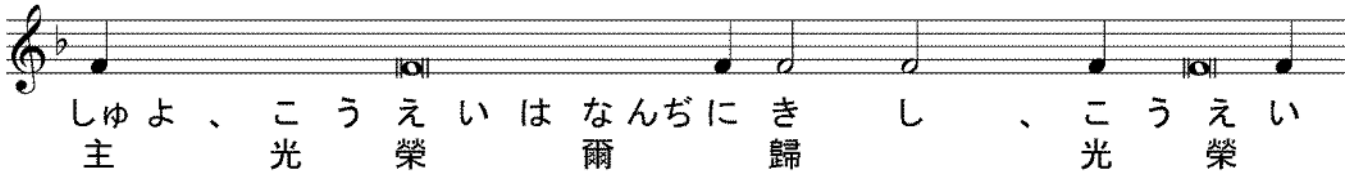
【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書62端 15章21~28節 】

司祭) 睿^{えいち}智^{つつし}、肅^たみて立^{せい}て聖^{ふくいん}福^{けい}音^き經^きを聴^きくべし、衆^{しゅうじん}人^{へいあん}に平^{へい}安^{あん}、

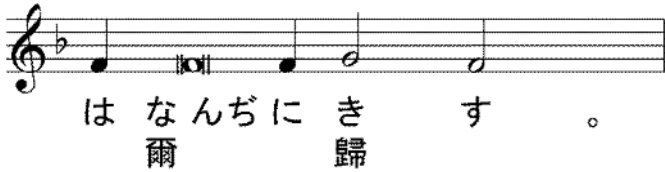


なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸

司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイス、ティル及びシドンの地に入れり。視よ、ハナアンの婦

そのさかい い かれよ い しゅ こ われ あわれ わ むすめ まき よ
其 疆 より出でて、彼に呼びて曰えり、主ダヴィドの子よ、我を憐め、我が女魔鬼に憑ら

ること 甚 し。然れども彼 一言も之に答えざりき。其 門徒就きて、彼に請いて曰えり、

これ さ けだしわれら あと よ かれこた い われ ただ いえ ほろ
之を去らしめよ、蓋 我等の後より呼ぶ。彼 答えて曰えり、我は唯イズライリの家の亡び

し 羊 にのみ 遣 されたり。 婦 近づきて、彼を拜して曰えり、主よ、我を助けよ。彼 答

えて曰えり、兒曹の餅を取りて、狗に投ぐるは、宜しからず。 婦 曰えり、主よ、然り、唯

いぬ またそのしゅ しょくたく お くづ くら そのとき こた かれ い ああおんな
狗も又其主の食卓より遺つる屑を食う。其時イイス答えて彼に謂えり、嗚呼 婦よ、

なんぢ しん おおい なんぢ のぞ ごと なんぢ な そのむすめこ とき い
爾の信は大なり、爾が望む如く爾に成るべし、其女斯の時より愈えたり。

(比較用 口語訳) イエスはそこを出て、ツロとシドンとの地方へ行かれた。すると、そこへ、その地方出のカナンの女が出てきて、「主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください。娘が悪霊にとりつかれて苦しんでいます」と言って叫びつづけた。しかし、イエスはひと言もお答えにならなかった。そこで弟子たちがみもとにきて願って言った、「この女を追い払ってください。叫びながらついてきていますから」。するとイエスは答えて言われた、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわされていない」。しかし、女は近寄りイエスを拜して言った、「主よ、わたしをお助けください」。イエスは答えて言われた、「子供たちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よろしくない」。すると女は言った、「主よ、お言葉どおりです。でも、小犬もその主人の食卓から落ちるパンくずは、いただきます」。そこでイエスは答えて言われた、「女よ、あなたの信仰は見あげたものである。あなたの願いどおりになるように」。その時に、娘はいやされた。

【 エヴァンゲリオン 福音經 イオアン福音書60端 19章6~11、13~20、25~28、30~35節 】

司祭) 彼の時司祭諸長と長老等と相會して、イイススを殺さんことを定め、彼を曳きて

ピラトに至りて曰えり、之を去れ、之を去れ、十字架に釘せよ、十字架に釘せよ。ピラ

ト彼等に謂う、爾等彼を取りて、十字架に釘せよ、蓋我彼に罪あるを見ず。イウデヤ

人答えて曰えり、我等に律法あり、我が律法に据れば、彼は死すべし、蓋己を神の

子と爲せり。ピラト此の言を聽きて、益懼れたり。復公廨に入りて、イイススに謂う、爾

は奚れよりする。然れどもイイスス彼に答を爲さざりき。ピラト彼に謂う、我に言わざるか、

爾豈我に爾を十字架に釘する權あり、亦爾を釋す權あるを知らざるか。イイスス

答えて曰えり、上より爾に與えられしに非ざれば、爾我に對して一も權あるなし、ピ

ラト此の言を聞きて、イイススを外に曳き出だし、審判座に、リヴオストラトン、エウレイの

言にガヴァタと名づくる所に坐せり。其日は逾越節の備日にして、時は約六時なり。

ピラトイウデヤ人に謂う、視よ、爾等の王なり。然れども彼等號びて曰えり、之を去れ、

之を去れ、十字架に釘せよ。ピラト彼等に謂う、爾等の王を釘せんか。司祭諸長對

へて曰えり、我等にはケサリの外に王なし。其時ピラト彼を十字架に釘せん爲に付せり。

彼等イイススを取りて、曳き行けり。彼己の十字架を負い、出でて、髑髏の處、エウ

レイの言にゴルゴタと名づくる所に至れり。彼處に在りて彼を十字架に釘せり、又二

人を彼と偕に釘せり、一は右、一は左、イイスス中に在り。ピラト標を書して、十

字架の上に置けり、書して云く、イイススナゾレイ、イウデヤ人の王と。イウデヤ人の多く

の者此の標を讀めり、蓋イイススの釘せられし處は城に近かりき、其標エウレイ、グ

レチャ、ロマの文を以て書されたり。イイススの母と、母の姉妹クレオパの妻マリヤと、マ

リヤマグダリナと、其十字架の旁に立てり。イイススはその母及び愛する所の門徒の

此に立てるを見て、母に謂う、婦よ、視よ、爾の子なり。次ぎて門徒に謂う、視よ、爾の

母なり。其時より此の門徒彼を己の家に取れり。厥後イイスス一切の事已に成りた

るを知りて、乃首を俯して神を付せり。其日は備節日にして、彼の安息日は大なる日な

^よるに^よ因りて、^{じん}イウ^{スポタ}デヤ^{しかばね}人は^{じゅうじか}安息^{とど}日に^{ため}屍^たを^か十^{かれら}字^{はぎ}架^はに^は留^はめ^はざ^はらん^は爲^は、^はピ^はラ^はト^はに^は、^は彼^は等^はの^は脛^はを
^お折^{しかばね}りて、^と屍^{とおろ}を取り^こ下^{ゆえ}ろ^{へいそつきた}さん^{かれ}こと^{とも}を^{じゅうじか}請^{てい}えり。故^はに^は兵^は卒^は來^はりて^は彼^はと^は偕^はに^は十^は字^は架^はに^は釘^はせら
^{だいいち}れ^{もの}し^は第^は一^はの^は者^はの^は脛^はを^お折^{だいに}り、^{もの}第^{またしか}二^{きた}の^{そのす}者^しにも^は亦^は然^はせり。イ^はエ^はス^はに^は來^はりて、^は其^は已^はに^は死^はしたる
^みを見^{かれ}た^はれば、^は彼^はの^は脛^はを^お折^{しか}ら^{ひとり}ざ^{へいそつ}り^{ほこ}き、^{もつ}然^{そのわ}れ^きども^は一^は人^はの^は兵^は卒^は、^は戈^はを^は以^はて、^は其^は脛^はを^は刺^はせり、^は忽
^ち血^{みづ}と^い水^はと^み出^{もの}で^{しょう}たり。見^なし^{そのしょう}者^{まこと}は^は證^はを^は作^はせり、^は其^は證^はは^は眞^はなり。

(比較用 口語訳) 祭司長たちや下役どもはイエスを見ると、叫んで「十字架につけよ、十字架につけよ」と言った。ピラトは彼らに言った、「あなたがたが、この人を引き取って十字架につけるがよい。わたしは、彼にはなんの罪も見いだせない」。ユダヤ人たちは彼に答えた、「わたしたちには律法があります。その律法によれば、彼は自分を神の子としたのだから、死罪に当る者です」。ピラトがこの言葉を聞いたとき、ますますおそれ、もう一度官邸にはいってイエスに言った、「あなたは、もともと、どこからきたのか」。しかし、イエスはなんの答もなさらなかった。そこでピラトは言った、「何も答えないのか。わたしには、あなたを許す権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのか」。イエスは答えられた、「あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに対してなんの権威もない」。ピラトはこれらの言葉を聞いて、イエスを外へ引き出して行き、敷石（ヘブル語ではガバタ）という場所で裁判の席についた。その日は過越の準備の日であって、時は昼の十二時ころであった。ピラトはユダヤ人らに言った、「見よ、これがあなたがたの王だ」。すると彼らは叫んだ、「殺せ、殺せ、彼を十字架につけよ」。ピラトは彼らに言った、「あなたがたの王を、わたしが十字架につけるのか」。祭司長たちは答えた、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」。そこでピラトは、十字架につけさせるために、イエスを彼らに引き渡した。彼らはイエスを引き取った。イエスはみずから十字架を背負って、されこうべ（ヘブル語ではゴルゴダ）という場所に出て行かれた。彼らはそこで、イエスを十字架につけた。イエスをまん中にして、ほかのふたりの者を両側に、イエスと一緒に十字架につけた。ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上にかけさせた。それには「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」と書いてあった。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。それはヘブル、ローマ、ギリシヤの国語で書いてあった。さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」。それからこの弟子に言われた、「ごらんなさい。これはあなたの母です」。そのとき以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。そののち、イエスは今や万事が終ったことを知って、首をたれて息をひきとられた。さてユダヤ人たちは、その日が準備の日であったので、安息日に死体を十字架の上に残しておくまいと、(特にその安息日は大事な日であったから)、ピラトに願って、足を折った上で、死体を取りおろすことにした。そこで兵卒らがきて、イエスと一緒に十字架につけられた初めの者と、もうひとりの者との足を折った。しかし、彼らがイエスのところに来た時、イエスはもう死んでおられたのを見て、その足を折ることはしなかった。しかし、ひとりの兵卒がやりでそのわきを突きさすと、すぐ血と水とが流れ出た。それを見た者があかしをした。そして、そのあかしは真実である。

エヴァンゲリオン
【 福音經 マルコ福音書 37 端 8 章 34~9 章 1 節 】

司祭) 主曰えり、我に 従 わんと 欲する 者は、己 を 捨て、其 十 字 架 を 負 いて 我 に 従 え。蓋

己 の 生命 を 救 わんと 欲する 者は、之 を 喪 わん、我 及 び 福 音 の 爲 に 己 の 生命 を 喪 わん

者 は、之 を 救 わん。蓋 人 若 し 全 世 界 を 獲 と とも、己 の 靈 を 損 わば、何 の 益 か あらん。

抑 人 何 を 與 えて、其 靈 の 償 と 爲 さんや。蓋 此 の 姦 惡 の 世 に 於 て、我 及 び 我 の

言 を 耻 ぢ ん 者 は、人 の 子 も 其 父 の 光 榮 を 以 て 聖 なる 天 使 等 と 偕 に 來 ら ん 時 彼 を 耻 ぢ ん。

又 彼 等 に 謂 えり、我 誠 に 爾 等 に 語 ぐ、此 に 立 て る 者 の 中 に は、未 だ 死 を 嘗 め ず して、神 の

國 が 權 能 を 以 て 來 る を 見 ん と する 者 あり。

(比較用 口語訳) 主は彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。邪悪で罪深いこの時代にあつて、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう」。また、彼らに言われた、「よく聞いておくがよい。神の国が力をもって来るのを見るまでは、決して死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸